

チベット語現代ラサ方言の2音節間に現れる -b- について

白井聡子

0. はじめに

現代チベット語において、最も生産的な語形成法は複合である。チベット語は基本的に1音節が1形態素をなす言語であるが、現代語においては2音節からなる複合語が生産的に形成される。現代ラサ方言¹⁾では、複合語を形成する2音節は音韻上強く結びつき、その形成の際にはいくつかの音交替現象が観察される。そのうちのひとつが、それぞれの形態素が単独で発音される際には存在しない子音が音節間に(第1音節末子音として)現れるというものである。

この現象に対する先行研究の分析は次の二つに分かれる。一つはもともと第1音節末尾にある子音が単独で現れるときには脱落すると考える分析、もう一つは古い形式における第2音節初頭の子音連続を反映してその最初の子音が第1音節末子音として現れると考える分析である。しかしそのいずれにも当てはまらないと思われる例が多数存在している。

この現象において第1音節と第2音節の間に現れる子音には何種類かあるが、そのうち最も問題があると思われるのは両唇閉鎖音 -b- である。-b- は第2音節初頭の前鼻音化音に由来する鼻音を除くと2音節間に現れる子音の中で極端に出現頻度が高い。一方、音節末両唇音はラサ方言の音節末子音の中で「最も安定」しており、「消えたり現れたりという現象を見せることが非常に少ない」子音である(胡坦1991: 90 参照)。よって、状況によって出現したりしなかったりする -b- がもともと第1音節末尾にあった子音である可能性についてはほぼ排除しうる。チベット文語²⁾との対応や他方言との比較から、古い形式における第2音節初頭の子音連続を反映していると思われる例もあるが、それでは説明できない例も少なくない。

そこで、本稿では、チベット語現代ラサ方言の2音節複合語音節間における音交替現象について、音節間に子音 -b- が現れる現象を中心に考察をおこなう。特に、

¹⁾ ラサ方言の資料は主に于道泉(1983)『藏漢対照拉薩口語詞典』に依る。ただし先行研究の挙げる例も一部採用した。また、インフォーマントとしてツェリン・ドルマ(tsering 'droma)夫人にもご協力をいただいた。ツェリン・ドルマ夫人は1935年生まれ、ラサの貴族階級の出身である。

本稿で扱う現代ラサ方言の音素は次のとおり。子音: p[p^h], t[t^h], t̪[t̪^h], ky[k^h], k[k^h], ts[ts^h], ʈ[ʈ^h]; b[p ~ b], d[t ~ d], d̪[t̪ ~ d̪], gy[k^h ~ g], g[k ~ g], dz[ts ~ dz], dz[ʈ ~ dz]; s, ʃ; m, n, ny[n̪], ŋ; ɱ, ñ, ŋ; l, r[ɹ], w, y[j]; ʃ, r[ɹ], ʃ[j]。母音: i, e, ε, a, ə, u, o, u およびその重母音と鼻母音。声調: 高平調 /.../, 高降調 /.../, 低昇調 /.../, 低昇降調 /.../; 無アクセント(声調を持たない) /.../。音節構造は V, VV, VC, CV, CVV, CVC。子音音素のうち、非常気閉鎖音および非常気破擦音は高声調で始まる語の初頭、音節末、末子音 -g, -b のあとの位置では無声音、それ以外の位置では有声音で現れる。子音に前鼻音化有声音 [ᵐb, ᵐd, ᵐd̪, ᵐg, ᵐdz, ᵐdz] を持つ話者もいるが、本稿では于道泉(1983)に従って前鼻音化有声音を認めない。声調については、2音節語が形成されるとその2音節単位でひとつの声調型を持つようになる」と解釈し、2音節語の左肩にその声調を示した (§1.1 参照)。

²⁾ 本稿では、9世紀に整備された書写語をチベット文語(もしくは単に「文語」と呼ぶ。この形式は現代文語にも概ね受け継がれている。なお、資料としては Jäschke (1881) を用いた。

第1音節末尾にも第2音節初頭にも本来なかった -b- が音節間に現れることがあることを指摘し、それがなぜ現れるかについての試案を提示したい。

1. 概況

1.1 2音節語形成の際に見られる音交替現象

現代ラサ方言において2音節語が形成される際にはさまざまな音交替現象がみられる。

2音節複合語が形成されると、一般に、第1音節は下降調と非下降調の対立を失って高平調または低昇調になり、第2音節初頭は帯気性と声調が中和して、一律に高くはじまる声調をもつ非帯気音になる (1a)²³。また、高母音を持つ音節と中母音または低母音を持つ音節の組み合わせで2音節語が形成される場合、母音の同化が起こることが多い (1b)。中・低母音が同化して高舌化する (a > ʌ, o > u など) ことが多いが、逆に低舌化 (u > o など) が生じることもある。

- (1) a. ʔtʰee [tʰe: ʔ] + ʔtʰe [tʰe: ʔ] → ʔtʰeeʔtʰe [tʰe: ʔ dʰe: ʔ]
 宗教 信仰 「宗教信仰」
 b. ʔmaa [ma: ʔ] + ʔmi [mi ʔ] → ʔmaami [ma: ʔ mi ʔ]
 軍 人 「軍人」

上記の現象に比べると散発的であるが、2音節複合語の第1音節末尾の形式が交替することがある。つまり、(2) のように母音終わりの音節に末子音²⁴が現れるほか、(3a) のように母音が長化・前舌化（時にその両方）を起こす、あるいは (3b) のように子音終わりの音節の末子音が別の子音になるという現象が見られる。それぞれ、左端に2音節複合語の例を、() 内に構成要素の単独での形式を、右端に文語形式を掲げた。

- (2)
- | | | | |
|--------------|--------|----------------------------|----------|
| | | | WrT. |
| a. ʔdzugdzii | 「11」 | (ʔdzu 「10」, ʔdzii 「1」) | bcu gcig |
| b. ʔdzubci | 「14」 | (ʔdzu 「10」, ʔci 「4」) | bcu bzhi |
| c. ʔtʰurdo | 「水中の石」 | (ʔtʰu 「水」 ʔdo 「石」) | chu rdo |
| d. ʔsamdoo | 「土色」 | (ʔsa 「土地」, ʔdoo 「色」) | sa mdog |
| e. ʔgāgo | 「柱の上端」 | (ʔga < ʔgawa 「柱」, ʔgo 「頭」) | ka 'go |

²³ 音節が高くはじめられるか低くはじめられるかという特徴のみが中和し、音節末尾が平下降調か非下降調かという特徴は残る。また、綴り字発音などの状況においては第2音節初頭にも帯気音が現れる場合がある。

²⁴ 鼻音の場合は、しばしば直前の母音と融合し鼻母音として現れる。例 (2e, j)。

- | | | | |
|--------------|---------|------------------------|------------|
| f. ˈdzugbən | 「十人隊長」 | (ˈdzu 「10」, ˈbən 「官吏」) | bcu dpon |
| g. ˈtɕubdza | 「うすいお茶」 | (ˈtɕu 「水」, ˈtɕa 「茶」) | chu ja |
| h. ˈdzurgu | 「19」 | (ˈdzu 「10」, ˈgu 「9」) | bcu dgu |
| i. ˈtɕumnyii | 「汚水」 | (ˈtɕu 「水」, ˈnyii 「かす」) | chu snyigs |
| j. ˈŋātso | 「私たち」 | (ˈŋa 「私」, ˈtso 「～たち」) | nga tsho |
- (3) a. ˈtɕuugaŋ 「水疱」 (ˈtɕu 「水」, ˈgaŋ < ˈgaŋbu 「殻」) chu lgang
b. ˈgamdzam 「段階」 (ˈgab 「時」, ˈtsam 「境界」) skabs mtshams

これらの現象において音節間子音²⁸⁵として現れるものとしては、-g-, -b-, -r-, 及び鼻音がある。その中には(2a)～(2e)のように文語形式とうまく対応する例もあるが、(2f)～(2j)のように文語形式と対応しない例も少なくない。

このほか、胡坦(1991)に記述されるように、一部の音節末子音については2音節語の第1音節末尾においてやや保持されやすく、語末では母音の代償延長を伴って脱落しやすいという傾向もある。

- (4) ˈnag ～ ˈnaa 「黒い[AS]」
a. ˈminaa 「俗人, 在家」 (ˈmi 「人」)
b. ˈnagdom 「闇市」 (ˈtom 「市場」)

1.2 先行研究

2音節語の音節間に子音が現れるという現象を中心的に扱った研究は少ない。一般的なラサ方言の記述においては、第2音節初頭の子音連続が語中(母音間)において現れるという説明がなされる(Kjellin 1976など)。

この現象に最初に注目したのは、Miller(1954)であろうと思われる。祖語の再建に利用するという観点から論じ、古い段階において第1音節末に存在していた末子音が現れていると結論づけている。

ある程度のまとまった記述と分析がなされているものとしては、Chang and Shefts(1965)およびShefts and Chang(1967)しかない。

Chang and Shefts(1965)の対象は第1音節が鼻母音, ŋ, m で終わる複合語で、これを第1音節末の口音素性(-V, -g, -b)と第2音節初頭の鼻音素性との融合したものと分析している。

²⁸⁵ 本稿では2音節語が形成されたときにのみ2音節間に第1音節末尾音として現れる子音を音節間子音と呼ぶことにする。

続く Shefts and Chang (1967) では、複合語が形成されなければ現れない両唇音 -b-, -m- を対象に、これをいずれの形態素に属すると考えるべきか——第1音節末に帰属させるのか、第2音節初頭に帰属させるのか——という問題を中心に分析を行っている。まず第1音節末に帰属させるという考え方については、そのように考えられる例もあるとしながらも、同じ先行形態素を持っていて -b- の現れない複合語があることの説明ができないとして、やや消極的である。これに対し、後続音節初頭に帰属すると考えられる例のうちいくつかは確実であり、文語形式からも裏付けられるものが多いとして、ややこちらの可能性に傾く結論を出している。

なお、白井 (1996) では不完全ながら音節間子音の分類を試みた。

1.3 音節間子音の現れ方

本稿では資料として『藏漢対照拉薩口語詞典』（収録語数約2万5千）および先行研究の例などから複合語を採集した。第1音節末に現れる音別の集計結果は次のようであった。-b- が現れる複合語は348例、-g- は16例、-r- は19例、-n- は516例、-ŋ- は170例、-m- は144例、母音が長化するものは35例あった¹⁸⁶。口音では -b- が突出して多いことが分かる。語彙的に決まっている子音が現れたり現れなかったりするものだとすれば、-g-, -r- といったバリエーションもある中で、-b- だけがこれほど多いのは不自然であるように思われる。

-b- の分布には次のような偏りが見られる。第1音節はほとんど(約91%)が本来単母音で終わるものである。これは、鼻音がどのような第1音節末尾にも現れうるのと対照的である¹⁸⁷。なお、語末で重母音を持つ音節末尾に -b- が現れる場合、(5)のように母音は単母音になる¹⁸⁸。

- (5) ʈʰabɕi 「形状、形勢」 (ʈʰaa 「生じる」, ʕi 「基礎、土台」)

また、Shefts and Chang (1967) の指摘によれば、音節間子音 -b- は後続音節が -b-, -m で終わるときは現れず、軟口蓋音の直前にも現れないという。

筆者の調べた限りでは、単独で発音されるとき末子音 -b- を持つ後続音節の前に音節間子音 -b- が現れる例は8例ある。ただし(6a)の1例を除いていずれも第2音節末尾の -b- は代償延長を引き起こして脱落する(6b など)。なお、後続音節末に限

¹⁸⁶ いくつか交替形がある場合、例えば -n- が現れる形と -m- が現れる形がいずれも可能な語や、-b- が現れても現れなくても可能であるような語については、現れる形式をすべて優先的に計上している。つまり前者のような複合語は、-n- と -m- とに二重に計上されている。また、-n- は第1音節母音の鼻母音化を含む（資料において表記上区別されていないため）。

¹⁸⁷ 鼻音は前部要素が重母音で終わるものである場合も現れうる。

ʕɛ̃dɔŋ ~ ʕɛ̃ɛ̃dɔŋ 「顔色[R]」 (ʕɛɛ 「口、顔[R]」, ʕdɔŋ 「色つや」)

¹⁸⁸ ラサ方言には CVVC という音節構造はない。音節末子音がある場合、母音は常に単母音である。

らず、音節間子音 -b- は基本的に同一語内で両唇音と共起しにくい。後続音節初頭が両唇音であるとき、その直前に -b- が現れることはほとんどなく、(6c) が唯一の例外である。第1音節初頭、つまり母音を挟んで -b- と隣接する位置に両唇音が来る例もほとんどなく、(6d) が唯一の例外である。また、軟口蓋音の直前に -b- が現れる例は(6e)の1例のみ、軟口蓋音 + u のあとに現れる例も1例しかない。このほか、硬口蓋破裂音と鼻音の直前に現れる例もどちらかといえ少くなく(それぞれ19例と4例)¹⁹、母音および半母音の直前には現れない。

(6) 例外的な現れ方をする -b-

- a. `tsabsub`gyaa 「灼けるように痛む」
(`tsa 「痛む」, `sub 「塞ぐ」, `gyaa [VBL])
- b. `lobsuu`gyaa 「空咳をする」
(`lo 「肺」, `sub 「塞ぐ」, `gyaa [VBL])
- c. `lebbam 「書籍」 (`lee 「板」, `pam < `pambo 「(本の) 節」)
- d. `mabdza 「孔雀」 (`ma [< Skt. mayūra], `tca 「鳥」)
- e. `lebgee 「かごのふた」 (`lee < `leebo 「かご」, `keb 「ふた」)

こういった、直後に現れる音による分布の偏りは、第1音節末にもともと存在する末子音 -b- には見られないものである。このことから、音節間子音 -b- は第1音節末子音 -b- とは異なるものであると考えられる。なお、第1音節末尾と第2音節初頭で両唇破裂音が連続する場合は、一方が消えることが多い。

また、-b- 以外の音節間口音 -g-, -r- については -b- が現れにくい環境に現れる例がやや多い²⁰。

2. 考察

2.1 第2音節初頭音の可能性を支持する例

いくつかの形態素について、2音節語の第2音節になった場合にかなりの割合で音節間の -b- が現れるという現象が見られる。その多くは(7), (8)のような他動詞完了語幹であり、動詞と派生関係にあると考えられる(つまり、いわゆる 'word family'

¹⁹ 鼻音の直前では -m- になっている場合が多いと考えられる。

²⁰ -g- は、単独では重母音を持つ前部要素のあとに現れる例や、単独でも末子音を持つ前部要素の末子音に取って代わって現れる例が多い(両方で12例)。また、-g-, -r- とともに両唇音・軟口蓋音の近くや硬口蓋音の直前といった、-b- が現れにくい位置に現れる例が多い。これまでに収集した例の中で、-b- が現れやすい環境に -g-, -r- が現れる例はそれぞれ5例と2例である。

をなす) (9) のような名詞語幹もいくつか含まれる^{注11}。

(7) `daa 「焼く[PFT]」

- a. `gobdaa 「靴底用の皮, 焼き皮」 (`go < `go(w)o 「皮革」)
- b. `cabdaa 「焼いた肉」 (`ca 「肉」)
- c. `nyabdaa 「焼き魚」 (`nya 「魚」)
- d. `nyibdaa `dag 「日に晒す」 (`nyi < `nyima 「日, 太陽」, `dag [VBL])

(8) `cɛɛ 「言う, 説明する[PFT]」

- a. `kabɛɛ 「話」 (`ka 「口」)
- b. `cobɛɛ 「さいころ賭博用語」 (`co 「さいころ」)
- c. `yubɕii 「トルコ石の話」 (`yu 「トルコ石」, `cii < `cɛɛ)

(9) `dzee 「遊び」 (cf. `dze 「遊ぶ[IMPF]」, `dzee 「遊ぶ[PFT]」)^{注12}

- a. `kobdzee 「武芸, 武術」 (`ko < `kodza 「鎧かぶと, 武器」)
- b. `dabdzee 「馬術」 (`da 「馬」)
- c. `tɕubdzee 「水遊び」 (`tɕu 「水, 川」)

ここに挙げたタイプの形態素が第2音節になると、音節間子音 -b- の現れやすい環境であれば (§1.3 参照) ほほ確実に -b- が現れる。これらの形態素については、音節初頭の b- が語頭などの位置では消えていると考えてもよいのではないと思われる。ほかに、数詞 `ci 「4」, `den 「7」, `gyɛɛ 「8」, `dzu 「10」, `gya 「100」 および名詞語幹 `cuu 「尾」, `ji 「におい」, `den 「敷物」もこのタイプに含まれる。

2.2 文語形式との対応と問題点

前節で見たような、音節初頭の b- が考えられる形態素をチベット文語の形式と対照してみると、ある程度の対応は認められるがすべてを説明することはできないことが分かる。

^{注11} Shefts and Chang (1967) において例示されている「初頭の b- を含む異形態がたてられそうな」形態素のいくつかも、他動詞完了語幹と関係があると思われる。Shefts and Chang (1967: 524-525) の番号ではVII類の 75, 77, 78, 80, 81, 84, 85, 86, 87。

なお、Shefts and Chang (1967) に初頭の b- を持つ例として挙げられている形態素のうち `tɕee 「半分」 および `tɕa 「鳥」については、現れやすい環境であるにもかかわらず -b- が現れない例が見られるため、このタイプからは除外しておく。

^{注12} 名詞「遊び」と動詞「遊ぶ」の完了語幹は現代ラサ方言においては同一の形式であるが、綴り字上は区別される (Wrt. rtse 「遊び」, rtse 「遊ぶ[PFT]」)。ここでは辞書に収録されている形式に従い、(9a-c) の第2音節を名詞「遊び」とした。

西田 (1957: 40) によれば、古典チベット語において他動詞の活用様式には 3 種類が認められるが、いずれの様式においても完了態形式は「接頭辞 b- によって特徴づけられている」という。この他動詞完了態形式が現代語においても保持されており母音間でのみ顕在化するのだとすれば、前節で挙げた例 (7), (8) などごく自然な音韻現象であると言える。

ただし、音節間子音 -b- が現れうる初頭子音 (§1.3 参照) を持つ他動詞完了語幹でもこのタイプに含まれないものがある。たとえば (10) `dzœœ 「作る, 作りかえる [PFT]」 が第 2 音節となる語のうち、音節間子音 -b- が現れる例は (8a) など 2 例のみで、-b- が現れない例の方が多く見られる^{注13}。この形態素は、少なくとも音節間子音に関する現象から見ると、単純に初頭の b- を持つとは考えがたい。

(10) `dzœœ 「作る, 作りかえる [PFT]」

- | | | |
|------------------|--------------|-----------------------|
| a. `sobdzœœ      | 「修理」         | (`so 「作る [IMPF]」) |
| b. `tɕidzœœ `kaŋ | 「外科」 | (`tɕi 「外」, `kaŋ 「建物」) |
| c. `ladzœœ       | 「いいかげんにやること」 | (`la 「容易な」) |

他動詞完了語幹の多くは文語形式において b- ではじまる初頭子音連続を持ち、その中には他動詞語幹にのみ可能な子音連続も含まれる。たとえば (7) `dʒaa 「焼く [PFT]」 の文語形式は bsregs, (8) `çœœ 「言う, 説明する [pft]」 は bshad である。(10) の `dzaa 「作る, 作り替える [PFT]」 も、音節間子音 -b- をあまり生じないにもかかわらず、文語形式は bcas で初頭の b- を持っている。これに対して、§ 2.1 で初頭の b- が考えられる例として挙げた形態素のうち、`dzœœ 「遊び」 (WrT. rtse^{注14}), `çuu 「尾」 (WrT. gzhuḡ), `ji 「におい」 (WrT. dri), `den 「敷物」 (WrT. gdan) はいずれも文語形式においては初頭に b- を持たない。文語形式における子音連続初頭の b- と現代ラサ方言の複合語に現れる音節間子音 -b- とが単純に結びつくものではないことは明らかである。

しかしなお、文語形式がある時期における口語を反映しているとの前提のもと、ある程度の対応関係をたてる試みもなされている。

Shefts and Chang (1967) は音節間子音の現象と文語形式との関わりについての考察を述べている。その中でいくつかの形態素について文語の音節初頭子音連続の初頭音 g- が音節間子音 -b- に対応するとしている。`çuu 「尾」 (WrT. gzhuḡ) や `den 「敷

^{注13} -b- が現れやすい環境で現れない例は 6 例。うち 1 例は音節間子音 -r- が現れるという、かなり特殊な例である：

`dordzœœ `tœœ 「邪を払う」 (`do 「魔法儀式」, `tœœ [VBL])

^{注14} `dzœœ 「遊ぶ [PFT]」 (WrT. rtse) も伝統的な綴りでは b- を持たない。現代文語においては brtse と綴られることもあるが、これは最も多いタイプの動詞完了語幹形式からの類推によって生まれた、比較的新しい綴りであると思われる。

物」(WrT. gdan)などの例を見るとその可能性もあるように思われる。では、音節間子音としては -g- もありうるにもかかわらず、なぜこれらの形態素が第2音節となったとき -b- が現れやすくなるのだろうか。この問題については、次のような分析が可能だろう。語頭の子音連続初頭の b- と g- はある時期に融合した。この段階においても母音間ではまだ対立を保っていたが、より多数を占める -b- の方に¹⁵次第に合流し、-b- が現れにくい環境では -g- に合流したのではないか。

アムド方言に属する夏河方言¹⁶との比較が、この説を支持する根拠になるかもしれない。夏河方言において、子音連続初頭の b- と g- は語頭では対立を失って h- になっているが、母音間においては対立を保っている例もある。また、夏河方言においては文語の子音連続初頭の r- も h- に対応しているため、`dzee 「遊び」(WrT. rtsed) などについても同様の説明が可能かもしれない。

(11)	WrT.	夏河	ラサ	
	sa	s ^h a	ˈsa	「土地」
	gdan	hdan	ˈden	「敷物」
	bdag	hdak	ˈdaa	「所有者」
	sa gdan	s ^h a hdan	ˈsabden	「絨毯」
	sa bdag	s ^h ap dak	ˈsabdaa	「地主」

以上のように、いくつかの形態素については古い形式における初頭子音連続と現代ラサ方言における音節間子音 -b- の出現との間に関係を認めることができる。しかしこれは一部の例の説明にしかない。たとえば、ˈti 「におい」(WrT. dri) が第2音節となったときには音節間子音 -b- が現れることが多く、この形態素はおそらく音節初頭に b- を持つと考えるのが適当であるが (§ 2.1)、文語形式にはそれに対応する初頭子音連続がない。また、文語形式と関連づける説明では音節間子音 -b- の出現の散発性とも矛盾することになる。たとえば (11) に挙げた ˈdaa 「所有者」(WrT. bdag) が第2音節となる語で、-b- が現れやすい環境であっても -b- が現れないという例もある。つまり、文語形式において初頭に b- を持つ形態素の方が、ˈden 「敷物」(WrT. gdan) のように文語形式で b- を持たない (b- 以外の初頭音を持つ) 形態素よりも音節間子音 -b- を生じにくいということがある。さらに、第2音節となったときに 1～2 例においてしか -b- を生じない形態素についても初頭子音連続ということで説明してよいのか。こういった問題についてはさらに考える必要がある。

¹⁵ ほとんどの他動詞完了語幹が b- を持つことと、他動詞完了語幹を第2音節に持つ語がかなり多いことから、音節間に現れる子音連続としては b- の方が多かったと言える。

¹⁶ 夏河方言の資料としては華侃・竜博甲(1993)を用いた。

2.3 初頭子音連続ではない例について

第2音節に *b-* を含む初頭子音があるとは考えにくいにもかかわらず音節間子音 *-b-* が現れる例が、無視できないほど数多く存在している。たとえば、*ˈɭaa* 「余り」が第2音節となる語で *-b-* が現れるのは (12a) のみである。*ˈɭaa* 「余り」に初頭の *b-* をたてることはできないだろう。*ˈɭaa* の文語形式は *lhag* だが、初頭に *lh-* を持つ形態素が第2音節となり、かつ *-b-* が現れる例は (12a) を含めて2例のみであることから^{註17}、文語形式と *-b-* が対応しているとも考えられない。

(12) *ˈɭaa* 「余り」

- a. *ˈdablaa* 「閏月」 (*ˈda* < *ˈdawa* 「月」)
- b. *ˈgyulaa* 「盲腸」 (*ˈgyu* < *ˈgyuma* 「腸」)
- c. *ˈɕalaa* 「食べ残しの肉」 (*ˈɕa* 「肉」)

同様に、第2音節初頭の *b-* が考えられない語の例を (13) に挙げる。いずれも第2音節となっている形態素は音節間子音 *-b-* を伴う例が1例しかなく、しかも §2.2 で見たような *-b-* と関連づけられる文語形式を持たないものである。

(13) a. *ˈobgyɛɛ* 「乳を入れる袋」

- (*ˈo* < *ˈoma* 「乳」, *ˈgyɛɛ* < *ˈgyɛɛba* 「革袋」)
- b. *ˈgobdee* 「果物皿」
(*ˈgo* < *ˈgo(w)o* 「皮革」, *ˈdee* < *ˈderma* 「皿」)
- c. *ˈtɕubdza* 「うすいお茶」 (*ˈtɕu* 「水」, *ˈtɕa* 「お茶」)
- d. *ˈtɕubsag* 「銅の水がめ」 (*ˈtɕu* 「水」, *ˈsaŋ* 「銅」)
- e. *ˈtɕabsoo* 「安い茶葉」
(*ˈtɕa* 「お茶」, *ˈsoo* < *ˈsobsoo* 「すかすかの」)
- f. *ˈɕabdzen* 「生食する挽肉料理」
(*ˈɕa* 「肉」, *ˈdzen* < *ˈdzenba* 「ナマの」)
- g. *ˈqabla* 「戦神」 (*ˈqa* 「敵」, *ˈla* 「神」)
- h. *ˈdobdzaa ˈɕoo* 「家畜が栄養不足である」
(*ˈdo* 「食物」, *ˈtɕaa* 「飼い葉」, *ˈɕoo* 「逃げる, やめる」)
- i. *ˈdobdzag* 「食事会」 (*ˈdo* 「食物」, *ˈtsaŋ* 「巣, 家」)

^{註17} 第2音節が *lh-* という文語形式を持ち、かつ *-b-* が現れる環境の2音節語は採集した中に16個ある。なお、*-b-* が現れるもう1例は (11h) である (WrT. *dgra lha*)。

- j. `nabɕaa`gyaa 「バター茶の油分で顔をマッサージする」
 (`na「鼻」, `ɕaa「油脂」, `gyaa [VBL])
- k. `nabɕu 「鼻炎の一種」                 (`na「鼻」, `ɕaa「膿瘍」)

Shefts and Chang (1967) はいくつかの形態素について末子音 -b を持つ異形態があるとしている。つまり、第1音節末尾に -b をたてるという分析である。たしかに (13b) の第1音節を形成する形態素 *ˈgo* 「皮革」、(13c, d) の *ˈtɕu* 「水」、(13f) の *ˈɕa* 「肉」、(13h, i) の *ˈdo* 「食物」、(13j, k) の *ˈna* 「鼻」などの形態素は、第2音節初頭に b- が考えられないような複数の例において音節間子音 -b- あるいは -m-^{注18} が現れる2音節語の第1音節となっている。しかし、§2.1 で見たような第2音節初頭の b- をたてるべき形態素の場合とは異なり、-b- が現れやすい環境でも現れないという例も多い (14e, f)。少なくとも単母音終わりの形態素については、明らかに音節末の -b をたてるべきものは見つからない。

(14) ⁻tɕu [水]

- a. ʔcubdʒa 「うすいお茶」 (=13c)
b. ʔcubsan 「銅の水がめ」 (=13d)
c. ʔcumnyii 「汚水」 (ʔnyii 「澱, 不純物」)
d. ʔcumduu 「水を加えた飼料」 (ʔduu 「ほこり」)
e. ʔcuʒuŋ 「たらい」 (ʔcuŋ < ʔcoŋ 「木盆, 桶」)
f. ʔcuree 「水着」 (ʔree 「木綿布」)

また、音節間子音 -b- と第 1 音節末子音 -b では分布が異なるという点や (§ 1.3), 末子音 -b は他の末子音に比べて脱落しにくいという点から考えても、多数の単母音終わりの形態素に単独では現れない -b をたてるという Shefts and Chang (1967) の説には無理がある。

以上から考えると、(12a) および (13) の各例に現れる音節間子音 *-b-* は第 1 音節末尾にも第 2 音節初頭にも帰属しない挿入音ということになる。

挿入子音がこのように散発的に現れる理由としてまず考えられるのは、類推の作用だろう。つまり、前節で見たような過程を経て、第1音節がCV、第2音節が初頭子音連続を持つ2音節語のうち相当数が音節間子音 -b- を持つようになった。その結果、2音節語の第1音節はCVよりもCVbのほうがより「無標である」と認識されるようになり、いくつかの語彙において第2音節の初頭子音連続とは関係な

^{注18} Chang and Shefts (1965) の言う「先行形態素の口音素性と後続形態素の鼻音素性」が融合した例、あるいは音節間子音 -b- が後続の鼻音に同化した例と考えられるもの。

く -b- が挿入されるようになった，ということかもしれない。(15) は，借用語がこの「無標」のタイプに合致する 2 音節語になっている例である。

(15) ˈgabli 「頭蓋骨」 < Skt. kapāla

第 1 音節にも第 2 音節にも帰属しない音節間子音 -b- の現れ方はかなり散発的であり，予想不可能である。これを類推によるものだと考える根拠および類推が比較的起こりやすい条件について次節で考察する。

2.4 語構造との関係

これまで見てきたとおり，音節間子音 -b- の出現は単に音韻上の問題として処理できる現象ではない。文語の g- を含む初頭子音連続についておこなった考察 (§2.2) においても，挿入音 -b- が現れるようになった経緯 (§2.3) についても類推によるものというのが有力な説となる。この説を支持する絶対的な証拠はないが，根拠となりうる背景のひとつとして，チベット語には他動詞完了語幹が第 2 音節となる 2 音節語が非常に多いという事実がある。その多くは (16) のように第 1 音節が名詞語幹で，この NS-VS[PFT] タイプの 2 音節語はかなり生産的に形成される。

(16) 音節間子音 -b- を持つ NS-VS[PFT] タイプの 2 音節語

- a. ˈɕabɕaa 「焼いた肉」 (=7b)
- b. ˈdabgyuu 「競馬」 (ˈda 「馬」, ˈgyuu 「走らせる[PFT]」)
- c. ˈkabgyoo 「歪んだ口」 (ˈka 「口」, ˈgyoo 「(無意識に)ゆがめる[PFT]」)
- d. ˈtɕubdzœ 「水煮」 (ˈtɕu 「水」, ˈdzœ 「ゆでる[PFT]」)
- e. ˈdobgyaa 「石段」 (ˈdo 「石」, ˈgyaa 「支える[PFT]」)

前節で見た挿入音 -b- が現れる例はいずれも第 1 音節が名詞語幹であり，名詞語幹以外の形態素が第 1 音節となっている 2 音節語に挿入音としか考えられない音節間子音 -b- が現れる例は今のところ見つかっていない。NS-VS[PFT] タイプからの類推がより生じやすい場合に挿入音 -b- が現れていると言ってよいだろう。また逆に ˈguɕuu 「本末，上下関係」 (ˈgu < ˈgo 「頭」, ˈɕuu < ˈɕugu 「尾」) のように 2 つの形態素が明らかに並列関係にある 2 音節語では -b- が現れにくいという傾向が見られることも傍証となるかもしれない。名詞語幹と動詞語幹からなる 2 音節語の場合，通常両者には何らかの支配関係ないし修飾関係があり，並列的であることはほとんどないからである。

しかし，(12b, c) のように CV という音節構造を持つ名詞語幹が第 1 音節となって

いるにもかかわらず -b- が現れない例も数多く存在する。挿入される音節間子音 -b- がなぜこれほど散発的に現れるのか、出現の条件をこれ以上厳密に決められるかどうかという点については未解決のままである。

3. まとめと今後の課題

本稿では、チベット語ラサ方言の2音節語に見られる音節間子音 -b- について考察をおこなった。

音節間子音 -b- には、従来言われていた第2音節初頭の子音連続を反映するもののほかに、第1音節末尾にも第2音節初頭にも帰属しない挿入子音であるものが存在する。第1音節末尾に帰属する音に由来するものは考えなくてよい。

音節間子音 -b- の発生の過程については次のように考えられる。

1. 初頭子音連続の初頭音 b- や g- などが語頭において中和した。
2. やがて語中においてもより多く存在する -b- に合流した。
3. その結果音節間子音 -b- を持つ2音節語が増え、類推によって、典型的なタイプに類似する第1音節を持つ2音節語においても散発的に音節間子音 -b- が挿入されるようになった。

なお、音節間子音 -b- が出現する厳密な条件については特定できなかった。今後の課題としたい。

《略号》

AS	adjective stem	Skt.	Sanskrit
IMPF	imperfective	VBL	verbalizer
NS	noun stem	VS	verb stem
PFT	perfective	WrT.	Written Tibetan
R	respectful		

《参考文献》

Chang, Kun and Betty Shefts

- 1965 A Morphophonemic Problem in the Spoken Tibetan of Lhasa. *Journal of American Oriental Society* No.85: 34-37.

胡坦 (Hu, Tan)

- 1991 「論藏語韻尾的隱現」『アジア・アフリカ言語文化研究』41: 83-90.

華侃・竜博甲 (Hua, Kan and Klu-'bum-rgyal)

- 1993 『安多藏語口語詞典』蘭州：甘肅民族出版社。

Jäschke, Heinrich August

- 1881 *A Tibetan-English Dictionary*. London : Routledge & Kegan Paul.
(compact ed. Kyoto : Rinsen Book Company, 1985)

北村甫・長野泰彦

- 1990 『現代チベット語分類辞典』東京：汲古書院.

Kjellin, Olle

- 1976 *A Phonetic Description of Tibetan - with a review of the literature*. *RILP* 10

Miller, R. A.

- 1954 *Morphologically Determined Allomorphs in Spoken Tibetan*. *Language* 30 : 458-460.

西田龍雄

- 1957 「チベット語動詞構造の研究」『言語研究』33 : 21-50.

Shefts, Betty and Kun Chang

- 1967 *Spoken Tibetan Morphophonemics* : p. *Language* 43 : 512-525.

白井聡子

- 1996 「チベット語複合語の形態素間に現れる子音について」京都大学卒業論文.

于道泉 (Yu, Dao-Quan) (主編)

- 1983 『藏漢對照拉薩口語詞典』北京：民族出版社.

(しらい さとこ, 京都大学大学院博士後期課程)

On the Inter-syllabic *-b-* in Modern Lhasa Tibetan

SHIRAI, Satoko

In Modern Lhasa Tibetan, a number of two-syllable compounds contain *-b-* between the two syllables, which does not appear with either member of the compounds in isolation. The inter-syllabic *-b-* appears as the coda of the first syllable which has no original coda.

The inter-syllabic *-b-* in some cases could be interpreted as the initial consonant of the initial cluster of the second syllable, but there are many examples which cannot be explained phonologically. This paper shows that in some cases the inter-syllabic *-b-* is the additional consonant which does not belong to the first or the second member of the compound.

The inter-syllabic *-b-* comes to existence by means of the following process :

- i. The initial *b-* and *g-* of initial clusters were neutralized in the word-initial position, though in the word-medial position they maintained the opposition.
- ii. They merged into *-b-* in the word-medial position. Because there are many compounds which consist of a noun stem (NS) plus a perfective stem (VS[PFT]) and in principle the perfective form had been marked by the initial *b-*, *-b-* occurs most frequently in the word-medial position.
- iii. After compounds with medial *-b-* were increased as a result of (ii), through the process of analogy, inter-syllabic *-b-* was inserted sporadically into the two-syllable compounds which have a codaless noun stem as the first member.